

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】 舘 葉月

【所属】 (助成決定時) 東京大学大学院

【研究題目】

第一次大戦後の捕虜帰還事業を巡る赤十字国際委員会の活動とフランスの政策：
国際人道活動の生成と進展

【研究の目的】 (400字程度)

私は、第一次世界大戦後の赤十字国際委員会による捕虜帰還事業の分析を通して、国際人道活動の生成と進展の過程を明らかにし、それを当時の国家主導の国際関係の中に位置づけることを課題として、研究を進めている。600万人の捕虜の帰還は1922年までかかった戦後の大事業であると同時に、現代と連続する国際人道活動の最初期の例でもある。この事業を牽引した赤十字国際委員会はジュネーブに本部を置く小規模な民間組織であった。中立性を原則に置く人道組織はどのような方法・資金・人員を用いて、安全で効率的な捕虜帰還を計画したのか。そうした民間組織の活動に対し国家はどのような対応をしたのか。非国家組織と国家双方をアクターとした国際社会の動体的な歴史分析により、第一次大戦後の国際関係に関する新たな歴史像を提示しすることを目指す。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

私は、フランス外務省文書館・同陸軍省文書館・赤十字国際委員会文書館・国際連盟文書館の史料を用いて以下の点について分析を行った。

1) 敗戦国捕虜の道具化と赤十字国際委員会の活動の限界

戦勝国出身捕虜が休戦後2カ月足らずで帰還が完了したのに対し、敗戦国出身捕虜の帰還時期の決定は講和会議まで持ち越され、さらにその間ドイツ人捕虜はフランスの荒廃地域の復興作業に従事させられた。講和会議議事録の分析を通し、ドイツ人捕虜の長期抑留が正当化された根拠を明らかにし、戦争被害賠償／条約遵守のための担保／国際法との適合性並びに人道的配慮、戦勝国有利の政策に対する赤十字国際委員会の活動の限界を示した。

2) 国際世論の形成と人道活動の関連性

ドイツ人捕虜の長期抑留に対する同情的な国際世論が形成された経緯を考察を、新聞や諜報員の報告書を使い、明らかにした。国際世論の形成が、赤十字国際委員会の救援活動を後押しし、1)で述べた戦勝国有利の国際関係が徐々に変化した一方で、具体的な政策転換までは促せない、国家に対する「人道的」国際世論の影響力あるいは脆弱性を分析した。

3) ロシア情勢を契機とした捕虜帰還問題の政治化と人道化

ロシア内戦による混乱と連合国の反ボリシェビキ政策は、独逸の約150万人のロシア人捕虜とロシアに抑留された200万人の敗戦国出身捕虜の帰還を著しく遅らせた。私は、捕虜にどのような政治的価値が付加され外交的に利用されたのか(政治化)、続いて、捕虜の政治的価値が低下した際に、捕虜帰還が「純粋な」人道問題として扱われ始める経緯を考察した(人道化)。この間に赤十字国際委員会は、戦後の国際関係の中で、単なる物質的援助や交戦国間の仲介ではなく、政治的・軍事的・経済的に国家の利害関係が強く関係する問題の調停・解決を期待されるようになっていた。そこで、申請者は、外交の場並びに実際の捕虜収容の現場で委員会が具体的にどのような活動を行い、救援体制をいかに発展させていったのかを明らかにした。

【結論・考察】(400字程度)

以上の研究内容から、赤十字国際委員会という非国家組織が、第一次大戦後の国際関係の中で、徐々に仲介者としての存在感を増していったことが明らかになった。その人道的性格と中立性は、国家間の交渉では複雑さを増すばかりの捕虜に関わる政治的争点を中和し、彼らの帰還を迅速に進めることに貢献した。自国のドイツ人捕虜を巡る政策に苦慮し、反ボリシェヴィキ政策から東部戦線の捕虜にも関心を持っていたフランス政府は、国際関係の新しいアクターとして登場した赤十字国際委員会との協力関係を重視しつつも、自国の利益の重視を優先させた。赤十字国際委員会もまた、他の人道組織との競合の中で、より堅固な立場と合理的な体制を整える必要に迫られ、そうした路線に則った人道活動が計画された。その点に関する分析は今後の課題とする。